

なごや 文化 情報

2018
1・2
January / February

No. 378
NAGOYA
Cultural
Information

随想／山田純嗣（美術家） 視点／多彩な情報発信を続けるまちの書店
この人と…ズームアップ／稲垣宏樹（指揮者）
いとしのサブカル／スージー（名古屋のちんどん「べんてんや」代表）



2018

1・2

January / February

Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 絵画鑑賞録
山田 純嗣(美術家)…………… 3

視点 多彩な情報発信を続けるまちの書店…………… 4

この人と…ズームアップ
稲垣 宏樹(指揮者)…………… 6

ピックアップ
名古屋能楽堂 開館20周年 「数百分の20」となるために…………… 8

いとしのサブカル
スージー(名古屋のちんどん「べんてんや」代表)…………… 9

おしらせ……………10

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座制作部長)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (椋山女子園大学教育学部准教授)

表紙

作品

世界食紀行

(2016年/木製パネル、ジェッソ、水干絵の具/162×112cm)

おいしいもの。世界中の文化遺産を見て、世界中のおいしいものを食べ歩きたいです。

家にこもって絵を描いていると本当はそれが真の幸せなのではないかと思うのです。



熊澤 未来子 (くまざわ みきこ)

- 1983年 愛知県生まれ
- 2008年 武蔵野美術大学大学院美術専攻日本画コース修了
修了制作優秀賞
- 2016年 第9回菅橋彦大賞展 倉吉博物館 大賞
- 2017年 個展「いったり、きたり」(ミヅマ アートギャラリー)

「2016年 名古屋市民文芸祭」
(第七七回名古屋短詩型文学祭)小・中学生の部
詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市会議長賞◆

名古屋市立二城小学校四年

山下 佳稟

しば犬の小梅

小梅の毛はフワフワ
小梅のしっぽはくるんくるん
小梅はとっても走るのが速い
かけっこは絶対に二等賞
だけど運動会には出れないね
小梅は食いしん坊
だけどおいしいお店には入れないね
小梅は学校にも行けない
小梅はいつもおる守番
小梅はかわいそう
犬だから仕方ないのかな
でも大切な家族なのに
一緒にお出かけしたいよね
今日も小梅はおる守番
小梅はさみしいのかな
見送る目がうるうるしてる

随想

絵画鑑賞録



やま だ じゅん じ

山田 純嗣(美術家)

1974年、長野県飯田市生まれ。1999年愛知県立芸術大学美術研究科油画専攻修了。2010年愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞。2012年「ポジション2012」(名古屋市美術館)、2013年「アイチのチカラ!」(愛知県美術館)、2014年「山田純嗣展」(一宮市三岸節子記念美術館)。2016年京都版画トリエンナーレ2016ニッシャ賞受賞。その他、国内、海外で個展、グループ展、受賞多数。

「ゴッホはゴッホであることを譲らなかった」先日、東京都美術館で開催されている「ゴッホ展」を鑑賞し、感じたことだった。この展覧会は、ゴッホが日本の浮世絵などに高い関心を寄せていたことや、のちの日本の画家たちが彼に憧れていたことなど、ゴッホと日本との相互関係を軸にしていた。その中で、ゴッホが浮世絵を模写し、引用したものの筆致に注目した。元の浮世絵は、木版画であるから、画面には筆跡やマチエールはなく平らな色面である。しかし、ゴッホはそれをそのまま平滑に塗るのではなく、広い色面にも一筆一筆油絵の具の盛り上がった筆致を残している。それゆえ、どんな作品もゴッホになっている。

また、別の日、愛知県美術館で開催されている「^{なが}長沢^{さわ}芦雪展」も鑑賞した。その中でも、芦雪が師の円山応挙の名代として南紀へ下った時に描いた作品、無量寺の《龍図襖》、《虎図襖》や草堂寺《群猿図屏風》の奔放な筆致に目を奪われた。その筆致からは師の元を離れ、のびのびとやりたい放題な芦雪の姿が目に見えようである。日本の過去の水墨画などの筆致は、力強さや繊細さなど感情を見事に表している。

一方で、日本の古来の絵画に使われてきた画材は、その特性によって表現方法が規定される。例えば、陰影がなく、色彩表現は貧弱で、筆遣いや輪郭が重要視される。そして、その技法の特性が有利に働くように主題が選ばれてきた。しかし、この主題選びの特性が、日本の近代の洋画家たちを苦しませてき

た。高橋由一の有名な《花魁》(東京藝術大学)や、原田直次郎《騎龍観音》(東京国立近代美術館)、山本芳翠《浦島図》(岐阜県美術館)など、日本の古来の主題を油絵で描くと違和感がどうしても拭えない。これらの作品に共通するのは、筆致の代わりに陰影が現れることである。

そこで、「ゴッホ展」に話は戻るが、この展覧会の終盤に「日本人のゴッホ巡礼」という展示があった。ゴッホの死後20年経ち、日本でゴッホが紹介されると、その熱狂は高まり、渡仏した日本人の多くがゴッホの作品をコレクションしたガシェ氏の元へ赴いたというもので、そこには芳名帳まであった。

この熱狂の後、大正、昭和の日本の洋画家たちはゴッホのように感情的に筆を走らせ、1930年代には安井曾太郎や梅原龍三郎など、陰影表現よりも伸びやかな筆致と色彩を優先した、以前のような画題の規定にも縛られない画家の個性豊かな洋画の完熟期を迎える。

この2つの展覧会から、絵画の表現が東洋と西洋の間を行き来し、相互に影響しあう中、筆致を再発見したように感じられ、画家が画家であること、絵画が絵画であることに筆致が深い関わりがあることを再確認して、興味深かった。

多彩な情報発信を続けるまちの書店

かれこれ40年近く前、書店店頭で本に「読んで、読んで」と呼びかけられたことがあります。ますのきよしさんという人が書いた『〈家族〉ってなんだろう』（現代書館刊）という本でした。当時、とくに家族というものを意識していたわけではありませんでした。本に呼びかけられたことで、自らの課題に気づいたのです。書店とはそれほど刺激的なところでした。いまでも、長い出版不況から抜けられたわけではありませんが、書店も、出版社もともに進化しようと動き始めています。（まとめ：山本直子）

丸善ゼミナール

2017年10月17日19時前、仕事を早めに終えて向かったのは、2015年4月に新しいビルに移った丸善名古屋本店。「人生において正しい選択は存在するか?」というテーマで哲学カフェがあると知ったからです。そもそも哲学カフェに人が集まるのだろうかという思いもありましたが、1階エスカレーター前の会場には30代から70代の男女が集まり、熱気があふれていました。『今夜ヴァンパイアになる前に【分析的実存哲学入門】』（L・A・ポール著 名古屋大学出版会刊）という翻訳本の刊行記念ということなので、翻訳した奥田太郎氏と薄井尚樹氏がゲスト、哲学カフェの発案者でもある三浦隆宏氏が進行役でした。最初は翻訳者からの話を聴くスタイルでしたが、後半の主演は集まった参加者たち。「自ら選んだわけでもなく、そこで人生が変わることもある」「そもそも選択できるのか」「後から正当化しているだけでは」などと、発言はとぎれることなく続き、2時間があっという間に過ぎました。

この哲学カフェは、第107回丸善ゼミナールという位置づけです。「丸善ゼミナール」（略して「マルゼミ」）について、坂本恭亮店長に訊きました。

「こちらに移転するにあたり、カフェと洋品売場がなくなりました。その分品揃えを強化して対応しようとしていましたが、古くからのお客様には『せっかくお店が新しくなったのがっかりした』と言われることもありました。開店して半年後くらいから、何か新しいものを生み出すしかないと思うようになり、仲間と一緒に考えて、ここにしかないものとしてトークセッションをすることにしました。ジュンク堂書店新潟店で大学の先生方とサイエンスカフェ



白熱する哲学カフェ

を開いていた経験を生かし、それを人文の分野にも広げれば良いと考えました。2016年4月15日に第1回を開催し、おかげさまで、1年半で100回を超えました。続けていく筋道はできたので、今後は参加者の満足度をあげて、本につないでいきたいと思っています」

本の路地裏横丁

丸善名古屋本店の坂本店長が、本を片手につなげて街にとけこみたいと、2017年の春からあためてきたのが「本の路地裏横丁 in 丸善～本の産直市@名古屋2017～」(略して「ほん×ろじ」)です。偶然ですが、店舗の北側には江戸時代から続く路地があります。そこに出版社が



丁寧に揃った本を並べて準備万端

店を出し、来場者に直接本をすすめる産直市。読書週間にあわせて、10月28日、29日に実施されましたが、2日ともあいにくの雨。路地裏での販売はできず、店内で各階に分かれての展開となりました。東京の神田や上野などで、同様のイベントを行っている本の産直市実行委員会の協力があり、参加した出版社は名古屋をふくめて全国の38社。どの出版社も、時間をかけて丁寧に本をつくり、読者に手渡していこうとしています。

この「ほん×ろじ」期間中も、出版ジャーナリストの石橋毅史さんが名古屋の出版社あるむ、樹林舎の編集者らと車座で語る「名古屋出版業界事情を語ろう!」、講師に名古屋外国語大学・濱嶋聡教授を招いた『アボリジニであること』（名古屋外国語大学出版会刊）刊行記念トーク、講師にフリーライター・編集者の今一生さんを招いた『日本一醜い親への手紙 そんな親なら捨てちゃえば?』（dZERO刊）刊行記念トークの3回のマルゼミが開催されました。また、名古屋の喫茶文化を支えてきたワダコーヒーと協力し、50回以上の試飲を経て完成させた本好きのための2種類のコーヒーも販売され、大好評でした。

本屋で一席!

台風が接近する10月22日、ジュンク堂書店名古屋栄店では初めての落語会が開かれました。文庫・新書売場の奥のギャラリーが落語会の会場に早変わり。雷門福三さんの「東山線の憂い」で、幸せな笑いに包まれました。『なごやじまん』（ぴあ刊）の著者大竹敏之さんも来場していて、終了後は気軽にサインに応じていました。

ジュンク堂書店名古屋栄店がオープンしたのは、2016年1月22日。このとき、名古屋市民はかなり驚きました。栄地区には、2009年にオープンしたジュンク堂書店ロフト名古屋店があります。そして、丸善名古屋本店が移転したばかり。3店も大きな書店が集まってしまって大丈夫なのかしらと余計な心配をした人たちもいます。

大竹康和店長は、「地下鉄の駅から地上に出なくてもよいので便利なのですが、ここに本屋があるということを知っていただくのに苦労しました」と言います。講談師の洋子さんが奇数月に行っている「書店で楽しむ講談」が、地下の書店の存在を広めるのに大きな役割を果たしてくれたとのこと。

もともとギャラリーを併設していて、絵本の原画展には力を入れています。「絵本を楽しむ人に、原画を見に行こうと気軽に訪ねてきてほしい」と、大竹店長は言います。取材当日は「猫ヂカラ展」の最終日。福三さんの背後にも猫が並んでいましたが、描いたのは書店員をしながら作家活動をしているふたり。ギャラリーは自己実現の場としても輝いていました。11月21日～1月7日は、大竹店長おすすめの、えほん『いっさいはん』原画展が開催されます。



本屋で一席!



猫ヂカラ展

書店員おすすめフェア

11月に入ってから、東区東片端の正文館書店本店を訪ねてみました。以前に各務貴子店長から、毎年、6月と11月には「書店員おすすめフェア」があると聞いていたからです。入口正面のフェア台の一角に手書きのPOPが目立つコーナーがありました。『食と健康の一億年史』（スティーブン・レ著 大沢章子訳 亜紀書



毎週日曜日14時はメルムに集合



年に1度のフロアコンサート

房刊)、『絶望を生きる哲学 池田晶子の言葉』（NPO法人わたくし、つまりNobody編 講談社刊）、『すき好きノート』（谷川俊太郎著 アリス館刊）などが並んでいます。3か月ほど前からスタッフ全員が1人2冊ずつおすすめ本を選んで、コーナーづくりをするのだそうです。「1か月のフェアが終わると、どのおすすめ本がいちばんたくさん売れたのかわかって勉強になります」と各務店長。

この書店では、毎日届く新刊を曜日別に並べています。棚を曜日ごとに分けて、下から3段が最新刊、その上が先週の新刊、その上が先々週の新刊とスペースは小さくなりますが、3週間分の新刊を眺めることができます。通常、書店では新しく入った本は分野別の棚に納められます。各務店長は「その日に出た本を一堂に集めることによって、いま、何がテーマとなっているのか、何が起きているのか、つまり、世の中がわかるからです」と、その理由を教えてくださいました。

児童書コーナーは「メルム」と名づけられ、毎週日曜日の14時から紙芝居があります。当日集まった子どもたちの年齢にあわせて、紙芝居や絵本を選び、ときには折り紙もします。隣接した会議室や店頭では、月に最低1回イベントを開きます。毎年11月3日文化の日にはフロアコンサートを開催。昨年は「楽しい木管アンサンブル」と題してドリーム木管五重奏団の演奏をお客様と楽しみました。

新刊を曜日別に並べるのも、紙芝居やトークイベント、フロアコンサートもすべて1995年から続いていると言います。1995年といえば、まさに出版業界の売上が最高だったころです。順調なときに先をみて必要な手を打ってきているのだと深く感銘しました。正文館書店本店の創業は1918年。今年で100周年です。

information

丸善名古屋本店

1月21日(日)15:00 『泣いて笑って食べた!』(高野久美子著) 刊行記念マルゼミ

ジュンク堂書店名古屋栄店

1月9日(火)～29日(月) 『キュンすけのおくりもの』(文・小原麻由美 絵・小島加奈子) 刊行記念原画展
1月21日(日)14:00～読み聞かせ

正文館書店本店

1月20日(土)10:30 『尾張名古屋の武芸帳 朝日文左衛門の武芸遍歴』(大下武著) 刊行記念講演会「尾張藩士のくらしぶり」

この人と...ズーム・アップ

「ズーム・アップ」は、現在活躍中の若いアーティストを取り上げる「この人と...」の特別企画です。



指揮者

いな がき ひろ き
稲垣 宏樹 さん

華麗なステージを演出するバレエ指揮者

豪華な衣装と舞台装置、磨き抜かれたダンサーの美とテクニック、そしてオーケストラの生演奏—それがバレエ芸術に欠かせぬ3大要素である。だが、それを実現できるバレエ団は“バレエ都市・名古屋”にも数えるほどしかない。ネックになるのはオーケストラ。信頼できる在名のプロオーケストラの数は少なく日程調整が難しい。経済的な負担も大きい。そして指揮者。バレエ音楽の指揮者は、オーケストラの指揮ができるだけではなく、バレエを熟知していなければ務まらない。稲垣宏樹は、東海地区では希少なバレエ指揮者なのである(文中敬称略)。(聞き手:上野茂)

自らの編曲で新たな全幕スコアを制作

2017年10月15日、岡田純奈バレエ団が愛知県芸術劇場大ホールで「ドン・キホーテ」(以下「ドンキ」)を、稲垣宏樹指揮・愛知シンフォニエッタの生演奏で上演した。実は稲垣には、今回の上演に特別な思い入れとこだわりがあった。

意外なことだが、「ドンキ」全幕分のオーケストラ用スコア(楽譜)は市販されておらず、上演の際はロシアの劇場で使用されている楽譜を借用するのが通例。稲垣は2007年、大阪の野間バレエ団で「ドンキ」を指揮し、第62回文化庁芸術祭優秀賞を受賞しているが、この時の楽譜は、稲垣自身がピアノ譜をもとにオーケストレーション(編曲)したものであった。

今回は、ピアノ譜にはない約15分間分を、残されている音源から32通りのパート譜を書き起こし、稲垣独自のオーケストレーションを行った。大変な労力と時間を費やし、637ページ(3冊に分割)4548小節(ちなみにオペラ「フィガロの結婚」は5519小節)の稲垣版「ドンキ」全幕スコアを完成させた。市販された指揮者譜があれば、まったく必要のない作業だった。

印刷された楽譜を見せてもらった。32のパートすべてが同時進行する指揮者譜である。ページはすべてパートごとにカラーリングされ、どの楽器がどのように重なり合い演奏されているかが瞬時に分かる工夫が施されている。

稲垣は「旋律線(主メロディー)をそのままにして、和音



(上)「ドン・キホーテ」のカーテンコール
(左)製本された「ドンキ」の全幕スコア

設定とオーケストレーションを、チャイコフスキーやグラスノフが行ったらどうなるか、楽しみながら作業を進めました」と苦笑する。「第3幕のエスパーダ(闘牛士)の踊りは、ラヴェルの『スペイン狂詩曲』の響きを真似たりもしました。せっかく書くからには、原曲より良いものにしたい。ダンサーの踊り心を触発できる音楽をつくりたいと思いました」と難儀な作業を振り返る。確かに本番の演奏では、これまで聴いたことのない、華やかな和音が随所に響き渡った。

指揮者自身が、こうした大掛かりな編曲作業を行うのはまれなことだが、バレエ指揮者にはさらにダンサーと共演するという重大な仕事がある。幾度もダンサーと稽古を共にして、ドラマを把握し、音出しの切っ掛けやテンポをつかむ。何よりダンサーとの良好なコミュニケーションを確立しなければならないのである。



公演前日のリハーサル。愛知シンフォニエッタを指揮する稲垣

レッスンピアニスト体験が転機に

稲垣は愛知県立明和高等学校音楽科(ピアノ専攻)から京都市立芸術大学作曲・指揮科(指揮専修)に進学。在学中から現代音楽に傾倒し、ルトスワフスキ、ノアゴー、グレットから現存する作曲家の日本初演を指揮してきた。転機になったのは、岡田純奈バレエ団からレッスンピアニストを依頼されたこと。岡田純奈を通して、稲垣はバレエの魅力に出会い、バレエ指揮者としてのキャリアをスタートさせたのである。

「バレエの指揮は、コンチェルト(協奏曲)に似ています。音出しのタイミングやテンポを独奏者(=ダンサー)に合わせる場合と、逆の場合があります。要は互いを認め合い、時には歩み寄ることも大切です」と実感を込める稲垣。2003年には大阪の佐々木美智子バレエ団の「パチフサライの泉」を指揮し、第58回文化庁芸術祭優秀賞を受賞。バレエ指揮者として脚光を浴びた。

近年では2014年、川口節子バレエ団の35周年記念公演「眠れる森の美女」、岡田純奈バレエ団創立50周年記念公演「白鳥の湖」(平成26年度名古屋市民芸術祭賞受賞)、松岡伶子バレエ団「くるみ割り人形」。2016年には岡田純奈バレエ団「ライモンダ」、松岡伶子バレエ団「シンデレラ」



稲垣のピアノ演奏で踊る
牧村直紀(2016年8月)



稽古場でダンサーの動きをチェックする稲垣

タクトを握ればアマチュアにも全力

稲垣の人となりについて述べたい。彼と私は、音楽家とジャーナリストというだけでなく、指揮者と出演者という関係でもあった。2007年、私が参加した名古屋演奏家ソサエティーの創作オペラ公演で、稲垣に指揮と音楽監督を依頼。3年間にわたり3作品にお付き合い願った。

プロの音楽家もいれば、私のような素人同然の輩(やから)もいる。稲垣には迷惑な仕事だったに違いない。しかし彼は嫌な顔一つせず、穏やかに、にこやかに仕事を進めた。どんな少人数の稽古でも、タクトを握った稲垣は、常に全身全霊で指揮をした。「音楽に込められた作者の思いを、全力で演技者に伝えるのが指揮者の仕事ですから」

私はまた2010年に、ゆうこ♡バレエスタジオの創立15周年記念公演「ロミオとジュリエット」に出演させていただいた。おかげで稲垣が指揮する中部フィルハーモニー交響楽団の生演奏を、幾度も間近に聴く機会に恵まれた。メロディーのほかに、CDでは聴いたことのない、さまざまな楽器の繊細な旋律が聴こえ、美しくゴージャスなオーケストレーションにうっとりしたものである。幸運にもこの公演は、同年度の名古屋市民芸術祭特別賞を受賞した。

話を冒頭の「ドンキ」公演に戻そう。盛況のうちに迎えたカーテンコール。オーケストラボックスから舞台上上がり、出演者、観客から大きな拍手を浴びる稲垣がいる。その時の気分を聴くと、「一瞬のこととはいえ、自分が中心に立つのは申し訳ない気がします。バレエの指揮者は黒子の一人ですから…」と恐縮する。いかにも稲垣らしいコメントである。しかし最後に「バレエの指揮は誰にでもできる仕事ではありません。私は常に誇りと責任を持ってタクトを振っています」と力を込めた。

ピックアップ

名古屋能楽堂
舞台びらき公演パンフレット
(平成9年)



能舞台の歴史は、
厳肅な《翁》から始まった。
(シテ・梅田邦久、
千歳・古橋正邦、
三番叟・佐藤友彦)

名古屋能楽堂 開館20周年 —“数百分の20”となるために—

名古屋城をぐるりと囲む公園地帯の、南西角に位置する名古屋能楽堂。入母屋造りの屋根、平屋建ての堂々とした外観は、近隣の官公庁街の無機質さとは、まるで対照的だ。玄関を入れば、白木の太い柱が贅沢に立ち並ぶ。そして、見所（けんじょ・客席のこと）への入り口のドアを開ければ、たちまち眼前に飛び込んでくる総ひのきの能舞台。能楽堂の“和”の空間が持つ、静かだが圧倒的な迫力には、何度訪れても強く胸を打たれる。

名古屋能楽堂は今年度、開館20周年を迎えた。主催事業の柱である定例公演も、年間テーマを「能楽師が20周年におくる能・狂言20番」と題し記念の年を盛り上げている。

定例公演は、東海地域で活動する能楽師の協力により、手頃な料金で良質な能・狂言を楽しめる企画だ。この他にも、名古屋能楽堂では、各種の講座や、能舞台を実際に歩くことのできるバックステージツアーなど、能・狂言の普及を目的とした企画に力を入れてきた。

そうした努力のおかげで、格式が高く縁遠いと思われがちだった能や狂言がいくぶん身近になったことは、この20年間、特に名古屋市文化振興事業団が指定管理者となってからの12年間の大きな成果だった。だが一方で、少しでも興味を持っている人がひととおりに、能や狂言を“味見”し終えたと考えられる今こそが、名古屋能楽堂のみならず能楽関係者すべてにとっての正念場ともいえる。

平成9年（1997）4月の開館は、多くの人の熱気に支えられて実現した。関係者によれば、能楽堂建設の構想は、名古屋城本丸御殿復元の基本構想が打ち立てられた昭和61年（1986）よりも、ずっと後のことだったという。つまり、能楽堂の建設は、構想から実現までのスピードが非常に速かったのである。しかも、途中でバブル経済の崩壊を迎えても、計画が揺らぐことはなかった。これを後押ししたのは、プロである能楽師からの働きかけはもちろん、素人の能楽愛好家による署名運動の力も大きかった。

そして、能楽堂をめぐる関係者の熱気の特徴ともいえるのが、2枚の鏡板（かがみいた）、つまり能舞台の背景となる、松の描かれた板である。1枚は、開館に合わせて準備された「若松」、もう1枚は、鏡板の伝統的な図柄である「老松（おいまつ）」だ。どちらも、名古屋市に本拠を置く団体や企業、そして能の愛好家からの寄付だった。

「若松」は名古屋出身の洋画家、杉本健吉の筆による。能舞台の鏡板としては、いかにも斬新、画期的な図柄だった。

これを残念に思った人たちが、鏡板を描いた実績の多い松野秀世に依頼してできたのが、「老松」である。

2枚の鏡板は、いずれも能楽を愛する人々の思いがこもった貴重な寄付であるとの観点から、能楽堂を所有する名古屋市は、開館の翌年から1年交代で鏡板を付け替えることとし、それは現在まで継承されている。平成30年3月末日までは「若松」、年度が変わると「老松」となる。

ただ、付け外し可能とはいえ、毎年繰り返すとすれば、図面の擦れなどの傷みが懸念される。そのため、そろそろどちらかに統一しては、という声も聞かれる。また、鏡板が替わるのを見るたびに開館当時の議論を思い出してしまっ…、という人もいるようだ。

人の一生に照らせば20年という月日は長く、一区切りの感が強い。だが、名古屋能楽堂の総ひのきの舞台はまだ瑞々しく、20年という年月を全く感じさせない。それはまるで、この20年が“100分の20”年、いや、さらに大きな年数を分母としたものにすぎないことを、舞台が我々に訴えかけているかのようだ。

インターネット全盛の時代にあって、ナマの能や狂言が持っている魅力や可能性を、どう発信していくのか。「老松」の鏡板のように伝統を重んじつつ、時には「若松」の鏡板のように大胆に…。そんな道を、愛好家のひとりとしても、考えていきたいと思う。



若松



名古屋能楽堂 二種類の鏡板

老松

いとしの サブカル

名古屋に再び 「ちんどん屋」の灯を!!

名古屋のちんどん「べんてんや」代表
スージー

名古屋生まれ。金城学院大学卒。女性ばかりのちんどん屋「べんてんや」を旗揚げし、アマチュア時代を経てプロに転向。全国選抜チンドンコンクール優勝。海外公演も行う(イタリア・イギリス・フランス)。愛する名古屋を拠点にメンバーと共に活動中。平成30年3月には中日劇場に登場!

チンチンドン、チンドン。街角から不意に聞こえてくる賑やかな音色。その音色がどこから聞こえてくるのかと探してみるも、もうその音色は通り過ぎてしまっていた…。

そんな経験がある方にはご説明するまでもありませんが、今や稀な存在となったちんどん屋。若い方たちからは、なんのことだかさっぱりわかりません、という声が聞かれます。

ちんどん屋は広告宣伝業です。派手で目立つ衣装を身にまとい、音楽を奏でながら街を練り歩き、時に口上を述べ、楽器や背中にポスターを掲示し、道行く人にチラシを渡して宣伝します。今ではそのような街頭宣伝の仕事以外にも、イベント・お祭り・パーティーなどさまざまなシーンでちんどん屋が活躍するようになりました。

私は2008年に、名古屋のちんどん「べんてんや」を旗揚げしました。笑い話ですが旗揚げ当初は練り歩いていると「学校に行かせてもらっているの?」とか「可哀そうに…、他の仕事を見つけなさい」なんて言われたこともありました。ちんどん屋に対して良いイメージを持っていない方たちがいらっしゃるのも事実。

でも驚くべきことにちんどん屋は日本の広告宣伝業の始まりとも言われています。衣装は和服もあれば洋服もあり。日本の楽器と西洋の楽器と一緒に演奏。演奏する曲もお囃子から懐メロ、アニソン、J-POP、洋楽となんでもござ

れ。古今東西・和洋折衷、柔軟な日本人の感性がもたらす摩訶不思議な魅力。そして周囲の人々をハッピーにすることができます。なんと素晴らしい職業でしょう!!

私が旗揚げした10年程前の名古屋には残念ながらプロのちんどん屋が存在しない状況でした。私はちんどん屋という日本が誇るべき日本独自の職業をこの名古屋で存続させたい、そんな思いもあり2011年にプロのちんどん屋に転身したのです。

ちんどん屋は、いまや伝統ある日本の大衆芸能の一端を担っているのではないのでしょうか。べんてんやは海外で公演する機会に恵まれ、海外の皆さんにも大変喜んでいただきました。特にべんてんやはカラフルなヘアスタイルが特徴で、よくコスプレと間違えられます。コスプレの聖地名古屋ならではのちんどん屋といえるかもしれません。

べんてんやが歩くと周囲の方たちの顔がぱっと明るくなります。ふわっと顔がほころびます。そんな笑顔が溢れる街は平和ですね。私はちんどんを通して世界中を平和にできるのではないかと考えています。あ、大袈裟ですかね!(笑)



ちんどんショー(ミラノ万博日本館にて)



名古屋のちんどん べんてんや

山三と阿国

SANZA
AND
OKUNI

名古屋市文化振興事業団2018年企画公演

オリジナルミュージカル『山三と阿国』

名古屋市文化振興事業団では、毎年、地元で活躍する音楽・演劇・舞踊をはじめとする舞台人の総力を結集し、新しい可能性を追求する企画公演を開催しています。1985年の「三文オペラ」を皮切りに毎年ミュージカルやオペレッタをオーディションで選ばれた地元のキャストと地元スタッフとともに上演してきました。34回目を迎える今回は、激動の戦国時代を舞台に、戦国三大美男子と謳われた武将・名古屋山三郎と、歌舞伎の創始者・出雲の阿国の恋物語を描いたオリジナルミュージカル「山三と阿国」を上演します。

事業団企画公演では実に8年ぶりとなるオリジナル作品「山三と阿国」は、原作・台本を地元出身の女流作家・奥山景布子氏、作曲を世界的に活躍する作曲家・大島ミチル氏が手がけました。豪華スタッフがお贈りする美しき愛の物語に、どうぞご期待ください。

【原作・台本】奥山景布子 (おくやま きょうこ)



Profile

愛知県生まれ。名古屋大学大学院博士課程修了、文学博士。小説家。NHKカルチャー名古屋教室講師。歴史小説の他、児童向け歴史読み物も執筆。2007年「平家蟹異聞」で第87回オール讀物新人賞を受賞、09年受賞作を含む「源平六花撰」で単行本デビュー。『びいどろの火』で第15回松本清張賞候補、「太閤の能楽師」で第4回歴史時代作家クラブ賞作品賞候補、「たらふくつてん」で第22回中山義秀賞候補となる。他、著書に「恋衣 とはすがたり」「時平の桜、菅公の梅」「稽古長屋 音わざ吹き寄せ」「寄席品川清洲亭」など。

昨年12月刊の「葵の残葉」では幕末の尾張藩主、徳川慶勝とその弟たちの生涯を描いている。

芸能に託す夢

「名古屋山三郎を主役に、脚本を」——名古屋市の文化振興事業団からの依頼には正直面喰らいました。2015年の、暑い夏の日のごとだったと記憶しています。

「脚本、ですか???!」——私、小説家です。お芝居は古いものも新しいものも、能や歌舞伎からミュージカルまで、なんたって大好きですけど、それはあくまで自分が見る側に立つてのこと。まさか、作る側に立つお仕事の依頼がくるなんて……。

しかも山三郎と言えば、言わずと知れたあの出雲の阿国のパートナー。お芝居界の大スターの一人で、これまでにいろんな方がいろんな形で物語になさっています。そんな題材を、脚本初挑戦の私に……だいじょうぶか事業団、ずいぶんチャレンジャーね、と思いつつ、「こんな素敵なチャンスはない!」と、その日のうちに「お引き受けします」とお返事をいたしました。

しかし、地の文であれこれと描写が書き込める小説とは違い、あくまで台詞と動きで進むのがお芝居。かつ、「山三と阿国」はミュージカル。歌詞も考えなければなりません。しかも演出の永井さんからは「現代にも通じるテーマで」との難しいご注文が……。

さてさて、七転八倒の果てにできあがりました脚本には、私なりに、「芸能に託す夢」を詰め込ませていただいたつもりです。

芸能、芸術は人の生死に直接関わるわけではありません。大きな災厄が襲ってきた時、世情が不安な時、芸に関わる者は、無力な己にいたたまれない思いをすることもあります。しかし、芸にしかできないこと、芸だからできることもある。文章という芸を生業にする者として、そのはかなさと可能性を、常に肌で感じていなければならないと思っています。そんな思いを、「山三と阿国」に込めました。

舞台は一期一会。「夢」のあるひとときを作るお手伝いができたとしたら、こんな書き手冥利に尽きることはありません。

【作曲】大島ミチル (おおしま みちる)



Profile

長崎県長崎市生まれ。国立音楽大学卒業。在学中に交響曲第一番「御誦」を発表。映画音楽、CM音楽、TV番組音楽、アニメーション音楽、施設音楽、ミュージカル音楽など様々な分野で活躍。

第52回、67回の毎日映画コンクール音楽賞受賞。第21、24、26、27、29、30、38回の日本アカデミー優秀音楽賞受賞。第31回日本アカデミー最優秀音楽賞受賞。他にも「鋼の錬金術師」でアニメーション・オブ・ザ・イヤー音楽賞受賞。ジャクソンホール音楽祭(アメリカ)ベスト映画作曲賞受賞。フランスの音楽祭への作曲、イギリスのゲーム雑誌で世界の過去全てのゲーム音楽でベスト1を受賞。中国映画、オーストラリア映画、日本トルコ合作映画の作曲など海外でも活躍中。

「山三と阿国」に寄せて

今回、オリジナルミュージカル「山三と阿国」のお話を頂いた時、名古屋市文化振興事業団が地元の文化を育てるために長年このような舞台を続けていることに深く感動しました。文化というものには日々の積み重ねでしか出来上がりません。即席に出来るものではありません。だからこそこのような事業が長く続けられているということは、必ず名古屋が未来の文化都市として確立するであろうと想像できます。その姿勢とスタッフの方々の熱い心に打たれ、私は即座に「是非一緒にやらせてください。」と返事をしました。脚本もとてもドラマチックで、かつクールでモダンな部分もあり、静と動のバランスも見事で素晴らしい作品だと感じました。音楽は最初に「唄がなければ」をオーディション用に2タイプ作曲しました。作曲をした後に私の頭に長く残っていたのはマイナーな曲調のメロディの方でした。最終的に全曲の作曲をする時も「唄がなければ」はこのメロディを使うつもりでずっと考えていましたが、他の曲を作曲していく過程で、ほとんどの曲がマイナーな曲調であることに気づきました。戦国時代の話となると、どうしてもマイナーな曲調の方が重みもあり作品のカラーも出しやすいのですが、私自身どうしても納得がいきませんでした。同時に「山三と阿国」のテーマは普遍性にあるとずっと思っていたので、その普遍性をむしろもう少し温かく包み込む形が良いのではないか?と考え、もう一つのメジャーな曲調の方を主にテーマとして使うことに決めました。そうしたら雲の合間から青空が見えてきたようにすっきりとした心持ちになりました。作品とは正面から見るだけではなく後ろや外側から見ることで発見するものがあるのだと改めて気がつきました。

そして今回演じてくれる方々によって一層の光や風を感じるかのように作品が生き生きと動き出しお客様へと伝えられていく…その喜びを深く感じています。スタッフ、キャストの皆さま、本当にありがとうございました。

日 時／2月23日(金) 18:30

2月24日(土) 11:00、16:00

2月25日(日) 11:00、16:00

会 場／名古屋市青少年文化センター・アートピアホール
[ナディアパーク11階]

料 金／S席4,000円、A席3,000円<全指定席>

※事業団友の会会員、障がい者手帳等をお持ちの方、学生は2割引
(事業団チケットガイド及び事業団の管理運営する文化施設での前売りのみ)

原作・台本／奥山景布子

作曲／大島ミチル

上演台本・演出／永井寛孝

音楽監督・指揮／西野 淳

振付／徳山博士

編曲／小塚憲二

管弦楽／セントラル愛知交響楽団

主催／公益財団法人名古屋市文化振興事業団

あらすじ

若くして武名をあげた名古屋山三郎だったが、戦乱の世に虚しさを感じ、仏弟子となる。師に従って尾張の熱田の宮を通りかかった彼は、酔い心地の武士たちにかまれていた踊り子たちを助けるが、成り行きで武士の一人を殺してしまったため、師から破門される。行き所のない山三郎を新たな芸の世界へと導いてくれたのは、踊り一座の出雲の阿国であった。「阿国とともに芸能の民として生きよう」——そう決めたはずの山三郎の心を一通の手紙が激しく揺さぶる。森忠政の妻となった妹が、森家への出仕を懇願してきたのだ。山三郎に残る武士の心を察した阿国は、あえて彼を一座から追放する。時を経て、森家の支配地で再会を果たした二人。そこへ山三郎を陥れようとする陰謀が迫り……。



出演



名古屋山三郎／GOH IRIS WATANABE

出雲の阿国／春日井こずえ

井戸宇右衛門／加藤武志

伊都／高見侑加

森 忠政／和田一詩



名古屋山三郎／荒川裕介

出雲の阿国／山口実紗

井戸宇右衛門／藤木 力

伊都／佐藤明日香

森 忠政／木村一輝

春屋宗園／小澤 寛

お岩／ちあき

養雲院／若村果央

林 為忠／園田裕史

井戸銀次郎／堀 拓哉

豊臣秀吉／鎌田 哲

ねね／高橋真冬

阿国の一座の踊り手、森家の家臣、侍女など／
愛染洗一、市岡優希、伊藤 茜、伊藤千紗、
稲熊美緒、URARA、加藤由真
ガラティオート尚美、川瀬邦成、川瀬百華、
倉橋由衣、小瀬水素古、小林宏輝、佐藤輝宜
手塚智捺、永田 萌、福井友香、森下敏弘、
森 悠希乃、山田紘子、吉田梨奈子

※本公演は一部ダブルキャストで上演します。

● は2月23日(金) 18:30、2月24日(土) 16:00、2月25日(日) 11:00、

● は2月24日(土) 11:00、2月25日(日) 16:00の公演に出演します。

～ 関連事業のご案内 ～

オリジナルミュージカル「山三と阿国」稽古場見学会

いよいよ稽古も大詰めとなる2018年1月終わり、本番に向け、スタッフ・キャストが一丸となって、日夜奮闘中! 寒さにも負けず、稽古場では熱気が高まっています。普段見ることのできない、ミュージカルの稽古場を覗いてみませんか?

日 時：1月27日(土)14:00～15:00
会 場：名古屋市演劇練習館(アクテノン)・5階リハーサル室
定 員：先着30名(1グループ5名まで)
料 金：無料
申 込 方 法：受付開始 1月5日(金)9:00～
お電話にてお申し込みください。
申 込 先：(公財)名古屋市文化振興事業団チケットガイド
TEL 052-249-9387(平日9:00～17:00)

1月にお届けするバラエティーに富んだ公演をお楽しみください。

ニューイヤー・コンサート
「人生はフルコーラス!!」～合唱の魅力をおあなたに


日時 1月14日(日) 14:00

会場 青少年文化センター・アートピアホール
 TEL 052-265-2088

料金 (全自由席) ※未就学児入場不可。
一般3,000円 学生2,000円
 (事業団友の会会員・障がい者等2,400円)

コード 346-837

名古屋で活動する2つの老舗合唱団と名古屋ゆかりの指揮者、声楽家、オーケストラが集結し、美しい日本の合唱曲から華やかなオペラ曲まで、彩り豊かなプログラムをお贈りします。新しい年に、「歌声」の魅力を存分にお楽しみください。




春風亭小朝 新春独演会

日時 1月25日(木) [昼の部] 14:00 [夜の部] 18:45

会場 青少年文化センター・アートピアホール
 TEL 052-265-2088

料金 (全指定席) ※未就学児入場不可。
1,800円 (事業団友の会会員様限定販売)
 ※未入会の方は入会手続きが必要です。
 ※お一人につき3枚まで。

その日の客席の雰囲気によって演目を間際に決めるという、ライブ感を重視した企画! 事業団友の会会員様限定販売ですので、未入会の方はこの機会にご入会ください(年会費3,000円)。大人気の公演チケットをお値打ちにお買い求めいただけるチャンスです。



フォルクハルト・シュトイデ ヴァイオリンリサイタル

日時 1月16日(火) 18:45

会場 熱田文化小劇場
 TEL 052-682-0222

料金 (全指定席) ※未就学児入場不可。
一般3,500円 大学生以下2,500円
 (事業団友の会会員・障がい者等2,800円)

コード 339-587

世界屈指のオーケストラ「ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の名コンサートマスターが登場します。ホールに鳴り響く重厚な音色と、世界レベルの技巧をお楽しみください。



鬼太鼓座コンサート

日時 1月29日(月) 18:30

会場 青少年文化センター・アートピアホール
 TEL 052-265-2088

料金 (全指定席) **コード** 345-695
新規入会3,500円 (5席のみ)
 ※事業団友の会会員一年間の会員権付き
S席3,800円 A席3,000円
 (事業団友の会会員・大学生以下・障がい者等 S席2,800円、A席2,400円)

心揺さぶる、衝撃のコンサートから1年…。世界を魅了し続ける、鬼太鼓座が再び名古屋に登場!!「走る・打つ・舞う」を極める、洗練された大迫力のパフォーマンスをお楽しみください!



チケット取扱い

- **名古屋市文化振興事業団チケットガイド** TEL:052-249-9387 (平日9:00~17:00/郵送可)
 そのほか名古屋市文化振興事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)でもお求めいただけます。
- **チケットぴあ** TEL:0570-02-9999
 ※サークルK・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。
 ※1月25日(木)「春風亭小朝新春独演会」の取扱いはありません。

主催  公益財団法人 **名古屋市文化振興事業団**

公演に関するお問い合わせは名古屋市文化振興事業団チケットガイドまで

平成29年12月25日発行(隔月1回25日発行)通巻378号
 編集発行/公益財団法人 名古屋市文化振興事業団
 〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP http://www.bunka758.or.jp/

頼もしい味方をお探しですか?



集客・販促プランナー アートディレクター 印刷コンサルタント

株式会社 駒田印刷株式会社 TEL(052)331-8881
 〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 http://www.kp-c.co.jp

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
 ハイビジョンで撮影し
 ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 **エーワン・ビデオ・システム**
 TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
 感動をおあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

← 20Hz → 20kHz →



A&V
 PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
 舞台音響 / 映像設備
 設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
 〒464-0846 愛知県名古屋千種区城木町二丁目98
 TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
 ◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・パレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社 マネージメント・プロ
 〒464-0850 愛知県名古屋千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
 TEL(052)735-3151 FAX(052)735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ① 舞台の企画・制作マネージメント
- ② イベントの企画制作
- ③ 芸術団体のコンサルティング
- ④ 舞台・イベントの運営